

義仲寺にて芭蕉を思う

藤原 道夫

またまた近江にやって来た。

近江八幡でビーフシチューのランチをとりながら、これからどこに行こうかぼんやり考える。八幡堀辺りを散策してから和菓子屋「たねや」に入り、奥の囲炉裏端風の所で焼き饅頭にお茶といこうか。それとも近江鉄道に乗って八日市まで行き、そこから百済寺を訪ねて本堂脇の鐘を思いっきり突こうか。これは明日にしよう。秋晴れの日、気ままな一人旅だ。

ふと義仲寺行きが思い浮かび、たちまち膨らんでいった。秋の日は短い、決断するや予約した近くのホテルに荷を預ける時間も惜しんで駅に向かった。

JR 膳所駅（大津市内）で降りて外に出るとタクシーが一台停まっていた。道に迷うのは避けたいという思いが勝ち、乗ってしまう。走りだすと運転手が言う「お客さん、歩いたほうが早いですよ」。

義仲寺は街中にあり、旧東海道に面している。この辺りは粟津ヶ原とよばれ琵琶湖を望む風光明媚な所だった。木曾義仲はこの近くで討たれた。

門をくぐると木犀の香りが漂ってきた。受付で貰ったパンフレットを頼りに細長く狭い境内をめぐる。芭蕉翁墓は先が三角形の細長な自然石で、その前に白百合など沢山の花が飾られていた。向かって左手に義仲公墓。細い道を挟んではす向かいに「**行く春を あふミの人と おしみける**」の句碑がたっている。

芭蕉は元禄七年（1694）旅先の大阪で客死し、遺言によって義仲寺に葬られた。伏見まで水路で運ばれてそこからは陸路、道中其角、曾良ら弟子 10 人が伴っている。葬儀に際して 80 人の門人らが焼香し、会葬者は 300 人に及んだという。生涯旅に生き、庵で過ごし客死した俳人の葬儀にしては賑やかだ。それだけ門弟に慕われ、近江で人望があったのだろう。

芭蕉は何故義仲寺を墓所に選んだのか、これが以前から疑問だった。芭蕉が近江の風土や門人たちに惹かれていたことは分かる。生前しばしば滞在した無名庵も義仲寺の境内にある。この庵に滞在中「**木曾の情 雪や生えぬく 春の草**」と詠んでいる。遺言の中に「木曾殿の右に葬る」とあることから、義仲の行状に心を寄せてい

たことは確かだ。それが具体的にどんな事なのか？ 受付の方に聞いてもパンフレットをよく読んでも、はっきりした答は出てこなかった。

帰りは駅まで歩いた。ゆったりとした上り坂で、10分とかからなかったろう。疑問は解けなかったものの、現地を訪ねてとっかかりが掴めそうな気になり、気分は晴々としていた。

帰宅して「木曾の情」を思いながら『平家物語』の巻九「河原合戦」と「木曾の最期」、それらを基に作られた能『兼平』の詞章（作者不明）を読み直した。

一時平家を駆逐し京都を制圧した義仲だが、頼朝が送った圧倒的な軍勢と戦って敗走する。もはや勝ち目はない。ただ気がかりなのは最後まで一緒に戦うと誓った兼平の安否だった。一時六条河原に進もうとしたが、兼平を探そうと大津の浜に向かう。そこで幸運にも兼平に行き合い、二人は手を取り合って喜ぶ。それも束の間、小競り合いが続き義仲の軍はついに総勢7騎に。その中に木曾から一緒だった鎧姿の愛妾巴がいた。義仲は巴を説得して落ち延びさせる。仲間は次々と討たれ、終に義仲と兼平のみとなった。兼平は主君に落ち延びるように強く進言する。義仲は納得したものすぐに馬ともども沼にはまり、拳句の果てに討ち取られてしまう。これを知った兼平は自ら壮絶な最期をとげた。

この物語に芭蕉は木曾の情を読み取り、深く感じ入ったと想像される。その情を心中に抱いて義仲所縁の地を訪ねている。そして自らの墓地として義仲寺を選んだのではなかろうか。このように推論してみたが、本当の理由は本人にしか分からない面があるとも思う。

余談だが、義仲寺を見学して興味深かったのは、寺の一番奥に膳所藩士水沼曲翠の墓があったこと。墓石が小さく、古くなさそう。この人は芭蕉が最も信頼した門弟の一人で、芭蕉が一夏過ごした幻住庵を提供している。曲翠は悪家老を刺殺した後切腹した。「私怨による」と遺言したため、藩は幕府のお咎めを免れた。パンフレットによると、このような事情により曲翠の墓は作られなかったのだが、昭和48年に寺境内に墓碑が建立された。近江の人たちによるこのような配慮に、芭蕉も曲翠もさぞかし喜んでいることだろう。